

大商人に醜聞を種に脅され毎晩馬車で犯される元傭兵従者の隷属日誌

タビユーへ

体
験
版

第1話 取引

弱みを一つ握られただけで、俺は商人の積荷になった。

晩秋の交易路は朝から霜で白い。

ヴァルガの隊商は荷馬車を十二台連ねて南の街道を下っていく。

俺はその十一台目で荷を守る従者として雇われている。

名はライ。二月前まで剣で飯を食っていた男だ。

腰には愛用の小刀が一本下がっている。

夜ごと砥石を当てて刃を絶やさないのは傭兵時代からの癖だ。

考えるより先に手が覚えている。

かつての俺なら気に入らねえ雇い主の喉元にこれを当てていた。

だが今は拔けない。刃を見せた瞬間に借り物の顔がはがれる。

この隊商に潜り込んで、もう十日になる。

昼は荷を担ぎ、夜は火の番をして、番頭の顔色をうかがう。

従者は荷を運んで飯を炊いて頭を下げる。

頭を下げるのだけは、性に合わない。

それでも耐えてきたのは、理由が一つきりだからだ。

恩人のガイがやってもいない罪で獄に落とされた。

その無実を仕組んだ証拠が、交易を裏で握る貴族の手にあるという。

証拠を盗んでガイを出す。そのためだけに従者の面をかぶった。

その面をヴァルガはたった二日ではがしにきた。

日が傾いた頃にいちばん奥の幌馬車へ呼ばれた。

垂れ布をくぐると香油と羊皮紙のにおいが鼻を突いた。

俺は入るなり癖で室内を見回す。

退路は入ってきた垂れ布一枚きり。

武器になりそうなのは卓の上の鉄の水差しくらいだ。

荷箱の上には革表紙の分厚い台帳が一冊載っている。

ヴァルガはその台帳を開いて羽根ペンを脇に置いた。

年のころは三十半ば。仕立ての良い上着に骨ばった細い指。商人らしく値踏みするような目だけがこちらを向いている。

「ライと名乗ったね。元傭兵の」

俺は答えない。黙って次の言葉を待つ。

「その肩の古傷は傭兵証の歳と合わない。名も顔も借り物だ」
背筋が冷えた。潜り込んでまだ十日だ。

それでこいつは俺の底を、二日で見抜いていた。

剣を持たない相手にこれほど追い詰められたのは初めてだった。

こいつの武器は刃じゃない。言葉と金と、この分厚い台帳だ。

「盗みに入る先を間違えたかな」

ヴァルガは笑わない。

「……何が言いてえ」

「取引だよ」ヴァルガは指の背で台帳を叩いた。「良い担保を見つけたという話さ」

「けっ」俺は鼻で笑ってやった。「趣味悪いな、商人サマ」

「お前の正体を隊商にばらしてもいい。役人に突き出してもいい」

骨ばった指が羽根ペンをつまむ。

「そうなればお前の恩人とやらも終わる。違うかな」

違わなかった。喉の奥が石を呑んだように詰まる。

ヴァルガは俺の正体を、たった二日で値踏みし終えていた。

この男の目は、人を人として見ない。

金になるか、荷になるか。それだけで人を測る。

俺も昔は金で人を斬った側だ。だから性根はわかる。

わかるからこそ、こいつには気を許せない。

俺が追っている貴族の名も、あるいは知っているのか。

その考えが頭をかすめたが、顔には出さなかった。

南の街まではあと十日。

その十日で証拠のありかを探って盗んで逃げ切る算段だった。

ここで役人に渡されれば、恩人ごと全部が消える。

俺は奥歯を噛んで腰の小刀を鞘ごと引き抜いた。

卓の上に音を立てて置く。降参の形だ。

迷いはなかった。降りる手札を、俺はもう持っていない。

だが降りたふりをして、手札を数え直す。

傭兵は負け戦でも退き際に必ず何か持って帰る。

この男は俺を売り物としか見ていない。

なら売り物として、こいつの懷に潜り込む手もある。

台帳の在り処、鍵の在り処、貴族とのつながり。

全部この検分とやらの中で探ればいい。

俺は顔を上げた。まだ詰みじゃない。

「……条件は」

「夜ごと私の検分を受けろ。台帳につける。それだけだ」

「検分だと」

「お前という積荷の値を検めるだけの話さ」

ヴァルガは台帳を無造作にめくった。

これだけ分厚いのには写しの束は一枚も挟まっていない。

商人が控えを取らない。記録は全部この一冊きりらしい。

妙だ。頭の隅にその違和感を留めておく。

「検分の一つ目は今すぐだ」ヴァルガが立ち上がった。「積荷の
検めだ。お前は今日から私の台帳に載る積荷だ」

野営のたき火のそばに俺は引き据えられた。

番頭と荷運びの男が二人。三人が遠巻きにこちらを見ている。

昼は俺に荷を担がせていた連中だ。

その目が今は、荷ではなく俺そのものを値踏みしている。

「新入りの荷を検める。手は止めるな」

ヴァルガの声は麻袋の数を数えるときと同じ調子だった。

「脱げ」

……見られてる。火の向こうから四つの目。

俺は上着の紐をゆっくり解いた。指を動かすのが一拍遅れる。

「もたつくな。全部だ」

下ばきに手をかけると夜気が腹とその下を冷たくなでた。

寒い。なのに耳の裏だけが妙に熱い。

男たちの視線が露わになった俺の体を上から下へなぞる。

その視線が肌を通るたびにうなじのあたりがちりちりした。

ヴァルガは細長い物差しを取り出した。

肩から胸へ当てて数を読み上げていく。

「肩幅は一尺六寸。胸板は厚い。傭兵の体だ」

羽根ペンが羊皮紙の上を走る音がした。

「腕の傷が多いな。剣だこも古い。書類の年数とは合わん」

ひとつずつ俺の嘘が数と一緒に暴かれていく。

物差しが今度は太ももの内側に当てられた。

男の一人が火の向こうで身じろぎする。

その視線が、股のあたりにはっきりと注がれていた。

俺は動けない。動けば盗人だと露見する。

ただ見られて数を数えられるしかない。

物差しの冷たい端が腹の線をたどってへその下まで下りてくる。

そして俺のそこにまっすぐ触れた。

「……っ、触んな」

「動くな。まだ検分の途中だ」

骨ばった指がなえた俺のものをつまんで軽く持ち上げた。

柔らかいそれを物差しに沿わせてまた数を読む。

「平常で四寸。芯はまだ入っていない」

男たちに聞こえる声でその寸法まで読み上げられた。

物差しがそのまま袋の下へ回り、玉の形まで検められる。

冷たい端が触れるたびに勝手に体がすくんだ。

「左右そろっている。傷もない。上物だ」

値をつけられているのは俺の一番情けない場所だ。

番頭たちの前でその良し悪しまで口にされている。

顔が焼けるように熱くなる。

なのに下腹の奥の方で何かがずくりとうずいた。

見られている。数を読まれて台帳に書き取られている。

その屈辱がなぜか熱を持って腰の奥へ落ちていく。

夜気が肌をなでるたびに、心臓が嫌に速く打った。

ヴァルガの指先が先端の割れ目を確かめるようになでる。

「ほう。先が濡れてきたな」

嘘だろと思って下を見た。

俺のそこはいつのまにか半分だけ頭をもたげている。

男たちの目の前で、勝手に。

「見られて高ぶるか。良い体だ。売値がつく」

荷運びの男が生唾を呑む音がした。

俺の裸にはつきりと欲の混じった目を向けている。

その目に見られていると思うと、そこがまた一回り膨らんだ。

台帳にまた羽根ペンが走った。

かり、かり、と乾いた音が俺の耳を刺す。

「張り、上々。艶、良し。記帳しておく」

番頭がごくりと喉を鳴らした。

その音までいやに鮮明に聞こえる。

誰かに見られて高ぶるなんて今日まで知らなかった。

こんな体だとは俺自身も知らなかった。

俺は奥歯を噛んでたき火の火の粉をにらんだ。

夜がふけて隊商は街道脇に馬車を止めて火を落とした。

俺はまたヴァルガの幌馬車に呼び込まれる。

中は狭い。荷箱が両脇に積まれて香油のにおいが昼より濃い。

天井から革の吊り革が二本垂れている。

「後ろを向け。手はそこを握れ」

俺は言われるまま二本の吊り革をつかんだ。

背をヴァルガに向けて両腕を上げた格好で固定される。

逃げようと思えば蹴り一発でこの布は破れる。

だが蹴った瞬間に俺は盗人になる。恩人が終わる。

だから握る。動けないふりをして握るしかない。

背後で小さな栓を抜く音がした。

とろりとした香油が手のひらで温められる気配。

その手がためらいもなく俺のうなじに触れた。

「ここに古い傷があるな」

油を含んだ指の腹が首の後ろの傷跡をゆっくりなぞる。

その瞬間にぞわりと鳥肌が背骨を駆け上がった。

「……………」

ひざが勝手に折れかけた。吊り革を握る手に力がこもる。

「へえ」 ヴアルガの声が一段低くなる。「ここがお前の急所か」

違う。そう言い返したいのに喉から声が出てこない。

骨ばった手のひらがうなじから肩へ、背中の真ん中へと下り

ていく。

油がひと筋、背骨に沿って垂れた。

冷えた夜気の中でその一点だけがぬるく熱い。

手は時間をかけて俺の背中の傷を数えるようになぞる。

傭兵の背中では傷だらけだ。どれもこいつの指が見つけていく。

肩甲骨の間を押されると腰が意思に反して前へ逃げた。

逃げた先には何もない。ただ吊り革に吊られているだけだ。

うなじの傷を今度は舌がはう。

濡れて熱い舌先が傷跡の上をぬる、ぬる、と往復した。

（———なんで、こんなところで）

舌先が傷の縁をなぞるたびにうなじの奥がじんとしびれた。

そのしびれはまっすぐ腰の芯へ落ちていく。

背中をはった手が脇腹をたどって腹へ回る。

へその下で止まり、それ以上は下りない。

焦らしだ。わざといちばん欲しい場所を避けている。

手のひらが太ももの内側をゆっくりと往復した。

欲しい場所のすぐ脇を何度もわざと外していく。

腰が勝手にその手を追って前へ突き出た。

「物欲しそうだな」ヴアルガの声が耳のすぐ後ろでした。

違うと言いたいのに腰は正直に揺れている。

腰が意思とは無関係に跳ねる。

前に回り込んできた手がやっと俺のものをやわらかく握り込
んだ。

油で滑る手のひらが根元をぬるりと包む。

もうそこは恥ずかしいほど硬くなっていた。

「さっき見られただけでこれか」

握った手が根元から先へゆっくり動き出す。

くち、くち、と油の絡む音がした。

先からにじんだ露が混ざって音が粘りを増していく。

ぬちゅ、ぬちゅ、と狭い馬車に水音が満ちた。

「あ……くそ、っ」

俺は奥歯を食い縛って声を殺す。

こいつの前で乱れるなんて死んでもごめんだ。

なのにうなじをなめ上げられるたびに背中から力が抜ける。

握られたそこが手の中でびくびくと脈を打った。

手の動きが少しずつ速く強くなる。

親指が先の割れ目をぬるりとこすった。

そのたびに腰がびくんと跳ねて声が漏れそうになる。

手のひらが根元を握り、指の輪が幹を上下する。

速さも強さもこちらの息づかいに合わせて変えてくる。

どこを触れば俺が弱るか、もう見抜かれていた。

商品を測るように俺の体を測っている。

じゅぷ、じゅぷ、と濡れた音が耳を犯す。

下腹の奥に熱がぎゅっと集まっていくのがわかる。

もう出る——そう思った瞬間に手がぴたりと止まった。

「——っ、あ？」

根元を指が万力のように締めつけている。

出したいのに出せない。寸前でせき止められた。

「まだだ」ヴァルガの声は平らだった。「私が許していない。勝手に出すな」

「っ、ふぎけ……んな、っ」

行き場をなくした熱が腰の奥で暴れ回る。

宙に浮いた腰がみっともなく震えた。

先っぽからは透明な露が糸を引いて垂れ続けている。

ヴァルガの指が張り詰めた先端をつ、となでた。

それだけで腰が跳ねて俺は齒を食いしぼる。

もう果てたい。この手で今すぐに。

だが根元を締める指は絶妙に力を緩めない。

出せそうで出せない熱が腹の底で渦を巻く。

汗が背を伝って香油と混じり、甘い匂いになった。

その匂いを自分でかいでいることに気づく。

みじめだ。なのに体はもっと欲しがっている。

「出したいなら言葉で頼め。それが検分の作法だ」

……頼む？ こいつに？ 冗談じゃない。

俺は肩越しに振り返って精一杯笑ってやった。

「頭は……下げねえよ、商人サマ」

強がりだった。脚なんてとつくに笑っている。

「そうか」

ヴァルガはまた手を動かし始めた。

くち、くち、と高ぶらせて限界の一手手前でまた止める。

二度、三度、四度。

止められるたびに俺のそこは透明な糸を長く垂らした。

糸は内ももを伝って生温かく滴り落ちていく。

頭の中がじわじわと白く濁っていった。

五度目は先端だけを指先で転がされた。

根元はもう握らず、いちばん弱いところだけをくりくりと。

腰から下が自分のものになつたみたいに震える。

出したいのに出させてもらえない。

その繰り返しで涙のようなものが目尻ににじんだ。

悔しさか快楽か、自分でも区別がつかなかった。

もう何も考えられない。いや、考えろ。

傭兵の頭を使え。

このまま焦らし殺されるよりこいつから何か引き出す方が得だ。

値のつり合わない取引は傭兵でもわかる。

「……条件、だ」かすれた声をどうにか押し出す。

「毎晩付き合ってやる。その代わり——」

息を継いで俺は切り札を口にした。

「お前のその台帳をいつか俺に読ませろ」

ヴァルガの手が一瞬だけ止まった。

背後の気配が値を計るように探ってくる。

「……ほう。積荷が条件を出すか」

しばらく値踏みの間があった。

「いいだろう。お前が良い積荷でいる限りはな」

交渉は成立した——ような気がした。

その直後に根元を締めていた指がふっと外れる。

「出している。全部見せてみる」

うなじの傷に歯が立てられた。

その鋭い痛みが引き金だった。

こらえていたせきが一息に切れる。

どく、と熱いものが根元から突き上げた。

びゆく、びゆるっ、と白い液が荷箱の側板を勢いよく汚す。

一度、二度、三度と脈打ったびに腰が跳ね上がった。

熱いものが次から次へと根元を通って抜けていく。

止まらない。こんなに出したのはいつぶりか。

声が自分のものと思えないほどみつともなく裏返った。

腰の奥がまだびくびくと波打っている。

出し切ったのに体の芯の熱がすぐには引かない。

三度目はもう届かず自分の内ももにぼたぼたと落ちる。

「……っ、あ、く……っ」

最後の一滴を絞り出すようにそこがひくついた。

ひざから力が抜けて吊り革だけが俺の体を吊っている。

息が上がっていた。指の先までじんとしびれている。

背後で羽根ペンを取り上げる音がした。

かり、かり、と羊皮紙の上を先が走る。

「よく出た。量も艶も悪くない」

ヴァルガは俺の腹に散った白いものを指ですくい取った。

その指を灯りの明かりに透かして眺める。

俺の出したものを値打ちものでも検めるみたいに見ている。

その目にも声にも欲は見えない。

ただ淡々と荷の質を確かめているだけだ。

それがどんな乱暴よりも俺の芯を冷やした。

「一晩目にしては上等な積荷だ。記帳しておく」

隷属日誌、か。

荒い息の下で俺はもう一度奥歯を噛みしめた。

積荷にされた。値をつけられて台帳に書き込まれた。

だが俺はまだ一度も頭を下げていない。

いつかこの一冊を奪い取って逆にこいつに値をつけてやる。

その台帳の中身が俺を助ける刃に化けるまで。

馬車の外で晩秋の夜風が幌をぱたぱたと鳴らした。

南の街まであと十日。

台帳の初日の欄がたった今俺の痴態で埋まった。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。

選択も、関係も、そして——結果も。

知らないまままで終わるか、

それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。